

天文班新聞

編集者

天文班 2学年

1学年

地球 原因不明の急加速

地球の時計が狂い始めている。

近年、地球の自転速度が急激に加速しており、2025年7月9日、22日、8月5日は、一日の長さが通常より約1.3〜1.5ミリ秒短いことが確認されている。この現象は2020年以降で顕著になっており、2024年7月5日には過去最大である1・66ミリ秒の短縮が観測された。これは、原子時計と実際の自転周期とのズレが拡大し始めていることを示している。

従来、地球の自転は月の潮汐力などの影響で長期的には減速傾向にあったが、最近では地球内部の核やマントルの動き、気候変動による質量分布の変化などが複雑に影響し、自転の加速をもたらしている可能性が高いとされている。

こうした変化は一見すると小さなものとも思えるが、GPSや衛星通信など、正確な時刻の同期が不可欠な現代のインフラにとっては極めて重大であり、世界では「負のうるう秒(世界協定時から1秒を削除すること)」の導入についての検討が進んでいる。

この地球規模の変動は一時的なものとは限らず、今後も類似の短い日が続く可能性があり、IERS(国際地球回転・基準系事業)などによる観測が注目されている。

さらに、2035年以降にはうるう秒制度そのものの廃止が検討されており、長期的には協定世界時と地球の自転周期との同期方法自体が変わる可能性もある。

ペルセウス座流星群 極大迫る

ペルセウス座流星群の極大(見頃)が迫っている。

この流星群はスイフト・タットル彗星からの塵が起源の流星群で、しぶんぎ座流星群、ふたご座流星群と並ぶ三大流星群の一つにも

数えられる。条件が良ければ極大時で

1時間に100回ほど流星が見られる

非常に大規模な流星群である。

放射点流星の軌道の延長線の交点

ペルセウス座の γ 星の近くにあるため

この名前がついているが、流星自体は

空全体で観察できる。また、放射点に

近いほど流星が光る時間が短くなる

ため、空全体を見るように観察するのが

いいだろう。長い時間光る流星を見たい

場合は放射点から90度ほど離れた空を

観察するのがおすすめだ。

極大は8月13日だが、その日は

月齢(月の形)が半月ほどであるため、

新月に近づく8月20日頃に空を

見上げてみてはいかがだろうか。



引用

写真：ペルセウス座流星群

<https://encrypted->

[tbn0.gstatic.com/images?q=tbn:A](https://encrypted-tbn0.gstatic.com/images?q=tbn:A)

[Nd9GcQMrmnI3IXdi6DxRtDNIC](https://encrypted-tbn0.gstatic.com/images?q=tbn:ANd9GcQMrmnI3IXdi6DxRtDNIC)

[KdWDIOikj1bqVqIYC54hXM06YY](https://encrypted-kdWDIOikj1bqVqIYC54hXM06YY)

[R19KoHT2DSU&s=10](https://encrypted-R19KoHT2DSU&s=10)